



主体性を育むための家庭科指導の工夫

～ 保育体験実習を通して ～

秋田県立大館高等学校 教諭 嵯峨 紀子

1 はじめに

秋田県立大館高等学校は、創立20周年を迎えた、秋田県で唯一、家庭に関する専門学科をもつ学校です。2016（平成28）年度には大館地区の3校が統合し、生活科学科が引き続き設置されることになりました。入学時は、普通・生活科学科としてくくり募集を行い、希望進路に応じて、2年次から普通科と生活科学科に分かれます。ボランティア活動も盛んに行われており、地域に根ざした学校として、様々な活動を通じて地域の方々との交流を深めてきました。

2 主題設定の理由と研究のねらい

大館高校生活科学科の活動として、産業祭への参加や施設実習を行っており、地域の方と交流する場面が多くあります。その中で、生徒が「自分から話しかけることが苦手」と感じている場面があり、実習先の施設の方から「コミュニケーション能力が不足している」と評価されることもありました。また、実習や交流の中で、指示を待っている場面があり、「今、何をしなければならないのか」と自ら考えることが苦手なのが実態です。そこで、自ら課題を見つけ、自分で考え行動することができる態度、いわゆる主体性を身に付けるということをねらいとし、専門科目「課題研究」の授業において保育体験実習を実施することにしました。子どもと触れあう楽しさや難しさを感じ、接し方を考えながら交流していくことで、親として子育てをしていくための力や、他者と関わる力の育成にもつなげたいと考えました。また、「子どもに関わる仕事に就きたい」と進路を考えている生徒も多いため、幼稚園教諭の働く姿を観察し、仕事内容を体験することで、職業観の育成にもつなげたいと考えました。

3 研究実践

(1) 実践Ⅰ 保育体験実習

生活科学科の2年生が履修する「課題研究」の授業において、保育に興味・関心の高い生徒が幼児交流を選択し、保育体験実習を複数回実施しました。実習前のアンケート調査からは、子どもと関わった経験が少ないため、幼児への接し方に自信がなく、子どもに対して消極的なイメージを持っている生徒が多いという実態が見えてきました。そこで、調べ学習をすることで目的意識を明確化し、研究テーマを設定してから保育体験実習に臨みました。実習後には、振り返りとしてグループによる話し合いを行い、実習で直面した様々な課題の解決に取り組みました。（図1・写真1）

図1 交流の流れ

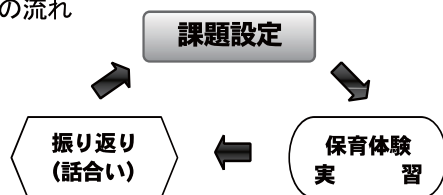


写真1 話し合い風景



生徒が直面した課題の一例を紹介します。『子どもが悪いことをした時の叱り方』に悩んだ生徒は、グループでの話し合いで、自らの体験談や意見をもとに、声の大きさや話し方を変えることで、子どもに分かりやすく注意することができると考えました。さらに、園長先生へのインタビューでは、子どもから理由を聞き、なぜいけないことなのかをきちんと話すことが大切であると確認することができました。(写真2)

実習後のアンケート調査では、幼児の行動力や個性の芽生えなどを実感しており、幼児に対するイメージが大きく変容していることが分かりました。子どもは手助けがなければ何もできないのではなく、一人の個性を持った人間であり、その子に合った接し方をしていくことが大切であると気付くことができ、さらに、具体的な接し方を身に付け、積極的に関わりを求められるようになりました。(写真3)

また、心を込めた手作りの物の大切さに気付くこともでき、牛乳パックやフェルトを使ったおもちゃやイスを製作し、幼稚園のみなさんへプレゼントしました。(写真4)

写真2



インタビューの様子

写真3



紙飛行機を作ってあげる

写真4



おもちゃやイスをプレゼント

(2) 実践Ⅱ 保育講話

「小さな命の輝き～まもなくパパやママになる皆さんへ～」と題して、大館市教育研究所の方から、乳幼児期の大人の関わり方の大切さや親になる心構えを、具体的な事例を交えて講義していただきました。また、実際に生後2カ月の赤ちゃんに触れ合い、子どものかわいさや温もりだけでなく、命の大切さも考えられるような授業になりました。(写真5)

〈生徒の感想〉

- ・「自分がパパになったらこうしよう！」と将来の設計図ができ上がってきた。
- ・今の私があるのも、親がしっかりと支えてくれているおかげなのだと思えて感じる事ができて良かった。

写真5



赤ちゃんとの交流

3 成果と今後の課題

保育体験実習を実施するにあたって、できるだけ生徒の主体性を重視した活動になるように心がけ、テーマの設定やよりよい接し方・遊び方を考察しながら交流してきました。その結果、試行錯誤を繰り返しつつ、主体性や課題解決能力を身に付けることができたと感じています。将来、子育てで悩むことがあれば、この経験をもとに、解決へ向けた取組をしていくと願っています。

今後の課題としては、個人や家庭だけでなく、社会的な視野を持って課題研究に臨み、地域や社会全体の保育環境についても深く考えることができる、より実践的な学習内容を目指していきたいと思えます。